

現代日本における社会問題の分析

田中重人 (東北大学文学部教授)

3年生・大学院生対象：2023年度1学期 <木2> 605 演習室 Google Classroom クラスコード qnej3t

1 『講義概要』記載情報 (一部)

到達目標: 社会問題を分析するための基本的なスキルを習得する。

目的・概要: 日本における社会問題について、各自の関心に基づいて問いを立て、資料・データを収集・分析し、批判的思考と議論を通じて答えを導くプロセスを体験する。受講者各自の関心にしたがって文献調査を行い、途中経過の報告と討論を行いながら日本近代史に関するレポートを作成する。

参考書: 佐藤望ほか (2020) 『アカデミック・スキルズ: 大学生のための知的技法入門』 (第3版) 慶應義塾大学出版会。

成績評価方法: 授業中の課題 (30%)、途中経過等報告と討論での発言 (30%)、期末レポート (40%)

2 この授業の目標

- 知的生産の技術
- 論文に書く内容を定めるまでのプロセス
- 意味のある問いと根拠のある答え
- メディア、他人、自分自身の利用方法
- 批判することの重要性

3 授業予定

- (1) イントロダクション [4/13]
- (2) 第1講 文献データベースの利用 [4/20]
- (3) 論文の読みかたと発表内容 [4/27]
- (4) 論文について発表 (1) [5/11]
- (5) 論文について発表 (2) [5/18]
- (6) 第2講 引用をたどる [5/25]
- (7) 第3講 中心的情報源 [6/1]
- (8) 第4講 専門用語と理論体系 [6/8,15]
- (9) 第5講 資料の評価と活用 [6/22]
- (10) 第6講 アイディアの創出 [6/29, 7/6]
- (11) 第7講 議論を組み立てる [7/13]
- (12) 第8講 価値ある研究のために [7/20]
- (13) レポート [7/27]
- (14) 口頭試問 [8/3]
- (15) レポート改訂版 [8/10]

受講人数などの都合で授業計画を変更する可能性があります。

4 注意事項

- 連絡や課題提出は Google Classroom で行う予定です。もし使えない場合には、教員まで連絡してください。
- 授業時間外に、個別面談やグループ活動をおこなうことがあります (その場合、受講者の都合にあわせて日時を設定)。

5 受講フォーム記入

- 自分の問題関心
- 日頃使っている学習、研究、資料整理、スケジュール管理の方法

6 レポートのフォーマット

この授業では、長い文章を書くことは要求しない。期末レポートでは、つぎのような形式で、必要な情報を短くまとめること (通常、A4用紙2枚以内)

- 問い
 - その背後にある大きな問い
 - 問いの学問的背景
 - 問いの社会的意義
- 答え
 - 必要な予備知識と前提
 - 答えの根拠
 - ありうる批判とそれをクリアする方法
- 問いを発展させる可能性
- 文献

問いと答え、それを導くための根拠 (証拠) の重要性については、山内・戸田山 (2022) など参照。

〔戸田山〕問いを探索したうえで重要な問いを明確に立てる。それに対する自分の、今のところ最善の答えを出す。ただ単に答えを出すだけではなくて、きちんと証拠によってサポートされたものを、他の人にも理解可能なかたちでまとめる。他の人はそれを読んで批判をして、議論をしたうえで、さらに良い答えに至る。以上のための最適の手段だからこそ、学生のみならずみんなが論文の書きかたを身につける必要があるわけです。研究者ではない人にとっても論文が書けることはすごく大事なことですし、世の中を良くしていくうえで、広い意味での論文はたいへん役に立つ。

(山内・戸田山 2022)〔強調は引用者による〕

7 文献検索について

論文検索方法 (簡易版)

8 宿題

自分の興味に合った論文を一つ選び、なぜその論文に興味をもったかを簡単に説明

- オンラインで読める論文であれば、その URL (あるいは DOI など) を書くだけでよい
- そうでない場合は、論文全体をスキャンしたもの (あるいは写真) も提出

来週の授業で2-3人のグループを決め、連休以降の授業で論文の内容についての発表をおこなう。

9 文献

山内志朗・戸田山和久 (2022) 「「論文を書く力」は、一生もののスキルです！」(対談) NHK 出版『本がひらく』2022年4月12日 07:00

<<https://nhkbook-hiraku.com/n/n58d920978fb6>> .

論文検索方法 (簡易版)

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] Google Scholar 等で論文を探すための最低限の知識

1 Google Scholar をとりあえず試してみる

<https://scholar.google.com> で、Google が蓄積しているオンライン情報のうち、論文等の学術情報に特化した検索ができる。ただし、学術的でない情報もかなり入っているので注意。

2 論文本体の入手

2.1 電子版

無料で公開されている論文の場合、リンクをたどるとそのまま論文本体 (PDF ファイルなど) がダウンロードできることが多い。

有料の雑誌などの場合は、「学認」(GakuNin) でログインすると読めることがある → <https://www.library.tohoku.ac.jp/search/e-contents.html> 参照。

「学認」でアクセスできない場合でも、大学内あるいは VPN 接続で読めることがある → <https://www.tains.tohoku.ac.jp/contents/remote/vpnstudent.html> 参照。

2.2 プレプリント等

大学等の研究機関での研究成果を集めてインターネット上で公開する「機関レポジトリ」が整備されつつある。また、研究者個人や学会のサイトで論文のファイルが公開されていることも多い。こうしたファイルを公開するための「プレプリント」と呼ばれるサービスも増えている。

このようなファイルを見るときは、**雑誌に掲載された論文と同一のものであるか** 注意すること。しばしば、投稿前の原稿や、出版後に加筆したものを収録していることがある。

2.3 冊子体の所在

東北大学附属図書館のサイト (<http://www.library.tohoku.ac.jp>) で雑誌を検索する。ISSN がわかる場合は、それで調べるとよい。雑誌名で検索するときは、詳細検索で検索対象を「雑誌」に限定したり、フィールドを「書名 (完全形)」に限定したりすると、ヒット数を減らせる。

「学外」にチェックを入れておくと、東北大学図書館内にはない場合には、学外まで所蔵を検索してくれる。国立情報学研究所 CiNii Books (<http://ci.nii.ac.jp/books>) も使える。

- 東北大学図書館本館にある → 借り出し (たいてい 2 号館にある)
- 東北大学内の研究室など → きいてみる (貸してもらえないこともある)
- 他の大学図書館など → 複写または貸借 (附属図書館 MyLibrary を利用)

3 学術論文 (的な文章) の見分けかた

- 数ページ程度以上の長さ
- 抄録 (abstract) がついている
- セクションがいくつかに分かれている
- 注がついている (ページ脚注または本文末)
- 末尾に文献リストがある

Google Scholar では、他の文献から参照されている回数 (Cited by) がついていれば、学術的な内容である可能性が高い。

4 発展編

田中重人 (2018) 「論文をさがす」 (現代日本論講読 授業資料) <<http://tsigeto.info/2018/readg/r180420.html>>

田中重人 (2018) 「論文をさがす (つづき)」 (現代日本論講読 授業資料) <<http://tsigeto.info/2018/readg/r180427.html>>

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

第1講 文献データベースの利用

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 先行研究の探索

1 書誌情報について

文献を特定するのに必要な情報を「書誌情報」(bibliographical information) という：

- 書籍の場合、著者名 / 出版年 / 表題 / 出版社
- 雑誌の場合、著者名 / 出版年 / 論文表題 / 雑誌名 / 巻, 号 / 掲載ページ (通常は雑誌名だけで特定できるので出版社は不要であるが、CiNii Books などてたしかめる)

論文でこれをどのように表記するかは、自分の分野の代表的な雑誌等のルールを確認しておくこと。

- 社会学の場合: 日本社会学会『社会学評論スタイルガイド』(第3版) 第4章 <<https://jss-sociology.org/bulletin/guide/document/>>

URLなどを示す場合は、つぎのような優先順位で考えるとよい：

- DOI (<http://doi.org>) や Handle 識別子 (<http://hdl.handle.net>) があればそれを書く (武田 2012)
- 複数の URL がある場合は、“Permalink” などと指示されているものか、なるべく短いものを選ぶ
- URL に #, ?, & が入っている場合は、そこから先を取り除いてみる

電子化された (インターネットで公開された) 文献は、従来の (印刷・製本された) 文献とは若干あつかいが異なる。

- 削除・変更されることが多く、その履歴がわかりにくい → 自分の見たバージョンをダウンロードするか、<http://web.archive.org> などのアーカイブ (魚拓) サイトに登録しておくことよい
- 特定するために何の情報が必要かが確定しにくい。著者名や日付が不明であることも多い。

2 先行研究を探すということ

2.1 探す対象

- 論文・書籍 (研究成果をまとめた文章)
- 資料・データ (研究の対象となるもの)

- 研究者・研究機関
- 研究プロジェクト (研究資金の流れ)
- 雑誌・データベース

2.2 探しかた

- 人に聞く
- 入門書・概説書・展望論文、一般向け雑誌、ウェブサイトなど
- 芋づる式
- 白書、データブック
- 各種データベース

一度の探索で網羅的に情報が集められるわけではないので、ふだんからアンテナを立てておくことが大切である。

3 論文・書籍のデータベース

研究成果は論文や書籍として発表される。

- 国立国会図書館サーチ <<http://iss.ndl.go.jp>>
- CiNii Research <<https://cir.nii.ac.jp>>
- CiNii Books <<http://ci.nii.ac.jp/books/>>
- Web of Science <<http://webofknowledge.com/wos>>(Institutional Sign In から “Japanese Research and Education (GakuNin)” を選び、東北大ID でログインする) →<http://tsigeto.info/2018/readg/r180427.html> など参照
- Google Scholar <<http://scholar.google.com>>

そのほか、図書館のホームページ <http://www.library.tohoku.ac.jp> から「資料を探す」→「データベース」タブを開いてみるとよい。

4 資料・データを探す

研究対象による。自分の研究分野の入門書や、代表的な研究機関のサイトなどを調べるとよい。

5 研究者・研究機関を探す

大学などでは、所属する研究者(教員・研究員・博士課程学生などをふくむ)の研究成果の情報を収集している。これを集積したデータベースが公開されており、そこから各研究者がおこなった調査の情報を得ることができる。

- 科学技術総合リンクセンター J-Global (科学技術振興機構) <<http://jglobal.jst.go.jp>>
- Researchmap (国立情報学研究所) <<http://researchmap.jp>>

また、研究者が個人的にウェブサイトを開設していたり、SNS等で情報発信していることも多い。

論文等について質問したい場合、著者本人に問い合わせてみるとよい。雑誌論文には著者所属やメールアドレスなどが書いてあることが多い。また上記の J-Global などでも連絡先を調べることができる。ただし、問い合わせの前に、公開されている情報をできる限り集めてから。

6 研究プロジェクトを探す

多くの調査研究は科学研究費補助金(文部科学省または日本学術振興会)などの助成を受けておこなわれているので、その研究課題のデータベース中に調査の情報がかなりある。

- 科学研究費補助金データベース(国立情報学研究所) <<http://kaken.nii.ac.jp>>
- 日本の研究.com <<https://research-er.jp>>

7 雑誌・データベースを探す

各研究分野には、通常、その分野の中心となる学術雑誌がある。そうした雑誌については、新刊情報をチェックするとともに、過去にさかのぼって読んでおく。

雑誌がつくられる過程(特に掲載する論文をどのように決めているか)に注意すること。

また、分野ごとにデータベースが作られていることも多い。附属図書館によるリスト <http://www.library.tohoku.ac.jp/search/database.html> など参照。

8 来週以降の予定

4/27は、各自の選択した論文に基づいてグループを決め、その各グループで、論文の内容について議論します。

そのあと(5/11, 18)の2回で、論文について発表します。

- 各自、自分の選択した論文について資料をつくる
- 授業開始時まで Google Classroom のストリームに投稿しておくこと

当日の発表手順は次の通り：

- 説明は、グループ内のほかの人がおこなう(2分)

- そのあと、論文を選択した本人が追加説明 (1分)
- 全体で討論 (10分程度)

報告すべき内容は次の通り：

- 論文の「問い」はなにか、それにどのような「答え」を出しているか、その根拠は何か
- 疑問点や批判など
- 内容を発展させる方向性

文献

武田英明 (2012) 「DOIって何?」 (図書館総合展 2012 版) <<https://www.slideshare.net/takeda/doi2012>>

現代日本学社会分析研究演習Ⅰ／現代日本学演習Ⅲ「現代日本における社会問題の分析」

論文について発表 (1)

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] グループ内のほかの人の選択した論文について内容を説明し、討論。

1 授業内容

各グループで、それぞれの選んできた論文について、事前に打ち合わせておく。各自、自分の選択した論文について資料をつくり、授業開始時まで Google Classroom のストリームに投稿すること。

当日の発表手順は次の通り：

- 説明は、グループ内のほかの人がおこなう (2分)
- そのあと、論文を選択した本人が追加説明 (1分)
- 全体で討論 (10分程度)

報告すべき内容は次の通り：

- 論文の「問い」はなにか、それにどのような「答え」を出しているか、その根拠は何か
- 疑問点や批判など
- 内容を発展させる方向性

2 発表予定文献

2.1 グループ1

- 岡本健「コンテンツツーツーリズムとインバウンド：現実空間・情報空間・虚構空間の移動を考える」『IATSS Review』45(1) (2020), pp. 51–57. <https://doi.org/10.24572/iatssreview.45.1_51>
- 谷口秀子「少女漫画における男装：ジェンダーの視点から」『言語文化論究』15 (2002), pp. 105–114. <<https://doi.org/10.15017/5433>>
- 池上賢「『週刊少年ジャンプ』という時代経験：解釈枠組みとしてのマスター・ナラティブ」『マス・コミュニケーション研究』75 (2009) pp. 149–167. <https://doi.org/10.24460/mscom.75.0_149>

2.2 グループ2

- 久井英輔「戦後における読書行動と社会階層をめぐる試論的考察：格差の実態の変容／格差へのまなざしの変容」『生涯学習・社会教育学研究』29 (2004), pp.1-13. <<https://doi.org/10.15083/00025134>>
- 橋本祥夫「キャリア・パスポートを中核にした小学校・中学校・高等学校の連携によるキャリア教育の意義と課題」『こども教育学部研究紀要』2022年度臨時号 (2022), pp. 25-37. <<http://id.nii.ac.jp/1431/00003299/>>
- 木村涼子「教室におけるジェンダー形成」『教育社会学研究』61 (1997), pp. 39-54. <<https://doi.org/10.11151/eds1951.61.39>>

3 課題 (5/24まで)

下記のことを調べて、再来週水曜日 (5/24) 12:00 までに提出。

3.1 【課題1】臨時号

『こども教育学部研究紀要』2022年度臨時号は、どういう経緯で出版されたものか。なぜ「臨時」なのか。

3.2 【課題2】雑誌の「特集」について

今回報告された6本の論文のうち、「特集」にふくまれるものはどれか。

3.3 【課題3】各自の論文で参照されている文献の同定

自分の選んできた論文で参照されている文献を、すべて同定する。ここで「同定」というのは、その文献が入手できる状態になること (図書館の所蔵やオンライン文献のURLがわかる、など) を指す。実際に入手しなくてもよい。

簡単には同定できなかったものについて、つぎのことをまとめる：

- その文献の書誌情報
- 同定に苦労した (または同定できなかった) 原因

論文について発表 (2)

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] グループ内のほかの人の選択した論文について内容を説明し、討論。

1 授業内容

前回と同じ。

2 発表予定文献

2.1 グループ3

- 田中秀憲「インターネットにおける「集団的な加虐の構造」に抗うために」『都留文科大学大学院紀要』27 (2023), pp. 111–130. <<http://doi.org/10.34356/00000870>>
- 閑田朋子「英語文化圏から見た浅草と浅草から見た西洋: 明治期の見世物と文明開化」『英米文化』53 (2023), pp. 59–73. <https://doi.org/10.20802/eibeibunka.53.0_59>
- 森田英嗣・五十里元子・田島知之・西村寿子・藤井玲子「沖縄「慰霊の日」報道はどう構成されているか: 2018年6月24日の新聞分析から」『大阪教育大学紀要: 人文社会科学・自然科学』70 (2022) pp. 121–136. <<http://doi.org/10.32287/td00032217>>

2.2 グループ4

- 今村美葉・正木治恵・野口美和子「パーキンソン病患者の疾病受容過程と看護援助について」『千葉大学看護学部紀要』19 (1997), pp. 79–87. <<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900020526/>>
- 寿台順誠「死別の倫理: グリーフワークと喪の儀礼」『生命倫理』23(1) (2013), pp. 14–22. <http://doi.org/10.20593/jabedit.23.1_14>

3 宿題

前回資料 参照

第2講 引用をたどる

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 引用・被引用関係を利用した文献探索

1 前々回宿題 1 (雑誌臨時号) について

『こども教育学部研究紀要』の2022年度「臨時号」の出版の経緯

「こども教育学部研究紀要」臨時号を発刊することができました。精力的に執筆してくださった投稿者、そして研究支援オフィスの皆様には、この場を借りて心から感謝申し上げます。本誌の発刊は、実践研究を中心に、投稿したいという声が多数集まったことにより発行することになりました。教育分野の研究成果を公表できる場の拡大に少しでも貢献できたのであれば、この上ない喜びです。

臨時号にもかかわらず、論文4篇もの投稿がありました。

(「編集後記」『こども教育学部研究紀要』2022年度臨時号(2022). <<http://id.nii.ac.jp/1431/00003302/>>)

同誌の刊行状況については「京都文教大学・京都文教短期大学 学術情報リポジトリ」<<https://kbu.repo.nii.ac.jp/>> の情報を参照。

2 前々回宿題 2 (特集論文) について

- 「特集：観光とインバウンド」『IATSS Review』45(1), pp. 4-57 (2020). <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iatssreview/45/1/_contents/-char/ja>
- 「特集：教育におけるジェンダー」『教育社会学研究』61, pp. 5-102 (1997). <<https://id.ndl.go.jp/digimeta/10393503>>

学術雑誌における投稿論文と依頼論文の違い：

- 投稿論文: 通常の手続きで投稿・審査
 - 編集委員が審査員 (ふつう複数) をえらび、論文原稿コピーをまわして判断を求める
 - 審査員が一致して「掲載可」なら掲載、「掲載不可」なら載せない。
 - 意見が割れた場合は編集委員が判断
 - 「条件付」の場合は書き直して再提出・再審査
- 依頼論文: 編集委員会の依頼で書く (テーマのきまった特集論文など)。審査のある場合とない場合がある

3 前々回宿題3 (文献の同定) について

基本的なこと：

- 図書館のデータベースに載っているものと載っていないもの
- 東北大学附属図書館 OPAC (<http://www.library.tohoku.ac.jp/opac/>) の配架場所の表示、「国内大学蔵書」検索タブ
- 国立情報学研究所 CiNii Books <<http://ci.nii.ac.jp/books/>>
- NACSIS CAT ID (NCID) → 学術情報センター目録所在情報サービス (<https://ja.wikipedia.org/wiki/NACSIS-CAT>)
- Worldcat <<https://www.worldcat.org>>
- 雑誌の場合、所蔵巻号の範囲が重要
- 書籍の場合、版 (場合によっては刷) が重要なことがある
- 同名の情報が多数ある場合
- 表題などがちがう場合、記載ミスがある場合

4 灰色文献

図書館で同定・入手することがむずかしい文献を「灰色文献」(gray literature) という。

- 新聞記事: いろいろな版があって、記事の特定がむずかしい (→縮刷版、記事データベース)
- テレビ・ラジオ番組: あとから参照することは通常できない
- インターネット上の情報: 内容が変更されたり、なくなったりする (ただし、学術雑誌を電子化したいわゆる「電子ジャーナル」は、印刷された雑誌と同等のものとみなされている)
- 卒業論文・修士論文: 通常、提出先機関にしか存在しない
- 博士論文: 古いものは、提出先機関と国立国会図書館にしか存在しないことが多い (2014年から電子版の公開が標準となった)
- 口頭発表・講演・授業: 出席者にしか内容がわからない
- 未発表論文・ワーキングペーパー: かぎられた研究者のグループ内でだけ流通する
- 古いもの

おなじ情報が本や雑誌にのっているなら、そちらを参照すること。図書館蔵書目録で探しやすいものを選択するとよい。

すでに削除されているインターネット上の情報については

- 文書名等で検索してみる
 - 各種アーカイブ (<http://archive.org>, <http://archive.is>, <http://gyo.tc>, <https://warp.da.ndl.go.jp>) で探す
- そのほか、同定がむずかしいケースとして、文献情報に誤記が含まれている場合がある。

5 宿題

前回宿題で同定できなかった文献があった場合、それを同定する。

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

第3講 中心的情報源

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 研究のための中心的情報源を見つける

1 大きな問い

論文の「問い」には、その論文中で、根拠を示して「答え」を出さなければならない。そのため、非常に絞り込んだ、小さい問いになる。

一方で、そのような問いは、より大きな問いの一部となっているのがふつうである。

- ある大きな問いに答えていくための、途中段階の小さな問い
- 範囲の広い問いについて、その範囲を限定した小さな問い

多くの場合、論文の冒頭で大きな問いを示したうえで、絞り込んだ小さな問いを検討する書きかたがとられる。

課題 1: 前回とりあげた各自の論文について、冒頭部分に「大きな問い」があるか?

2 学問分野

今日の学術研究は、細分化された分野(○○学、○○論など)にわかれておこなわれている。学会や学術雑誌は分野別に編成されているし、研究者も細分化された教育システムで育つ。

課題 2: 前回とりあげた各自の論文は、どの学問分野に属するものか?

たとえば、雑誌の発行元、著者の経歴や所属学会、引用されている文献の傾向などを調べてみるとよい。

3 中心的情報源

ある研究対象や学問分野について調べるには、それについての中心的情報源を把握しておくといよい。

3.1 学会

日本学術会議 協力学術研究団体一覧

- <https://www.scj.go.jp/ja/gakkai/> (分野別)
- https://www.scj.go.jp/ja/info/link/link_touroku_a.html (五十音順)

各団体のウェブサイトから、刊行物、学会大会プログラムなどをみるとよい。

3.2 雑誌

学会が出している雑誌については、上記参照。

その他の雑誌 (商業誌・同人誌・研究機関刊行物など) は、下記「古典／定番文献」を参照。
掲載論文を数十本程度読んでみるとよい。

3.3 教科書・事典類

多くの分野には、定番の教科書や事典がある (ない分野もある)。くわしい人に聞くとよい。

3.4 古典／定番文献

特定の対象について、しばしば引用される古典的あるいは定番の文献のあることが多い。

- Google Scholar で被引用数 (cited by) を調べることができる。ただし日本語文献は電子化されていないものが多いため、あまりうまくいかない。
- くわしい人に聞く

3.5 その他

それぞれの分野や研究対象によって、特別な位置を占める研究機関、図書館、研究者 (集団) のある場合がある。

4 宿題

各自の研究対象 (1つ) と学問分野 (2つ) について、中心的情報源となりそうなものを、それぞれ1つ以上見つけること。

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

第4講 専門用語と理論体系

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 用語・概念と理論について

1 概念 (concept)

- 名称 (用語)
- 内包 (intention): どんな性質のものか → 定義
- 外延 (extention): なにが含まれて何が含まれないか
- 分類と境界事例
- アイデア (idea) と理想型 (ideal type)

2 理論 (theory)

統一的説明を与えるための体系的知識。通常、概念間の関連のかたちで表現される。

- 共通性の発見 (帰納: induction) と概念構築 (conceptualization)
- 単純化とモデル (model)
- 公理 (axiom: 検証されない前提) と演繹 (deduction)
- 予測 (prediction) と因果 (causality)

3 仮説 (hypothesis) と実証

世の中が実際にどうなっているかに関して

- 事実、データ、資料
- 直観 (intuition) と仮説構築
- 仮説検証と論理実証主義 (logical positivism)
- 観察と実験 (介入)
- 共同主観 (intersubjectivity) と社会的事実 (social fact)

4 規範 (norm) に関する議論

世の中はどうあるべきか、私たちは何をすべきか (すべきでないか) に関して

- 価値 (value) をどう扱うか
- 正当性と一貫性

5 具体的な論証 (argument) の形式

Toulmin (1958) のモデル

- Claim (結論)
- Data (論拠): 事実として観察できる事柄
- Warrant (保証): Data から Claim をなぜ導出できるか
- Backing (裏づけ): Warrant の根拠
- Rebuttal (反駁): 例外や誤差の指摘
- Qualifier (限定子): Claim はどの程度確からしいか

氏川 (2007)、青木 (2016) なども参照。

6 次回までの宿題

次の資料を作り、授業開始時間までに Google Classroom の「ストリーム」に上げておくこと。

- 各自の研究課題 (または適当な論文) について、専門用語を 5-10 個えらび、その定義と、相互の関係を示す
- その研究に関連したどのような「理論」があるか、ひとつ以上紹介

文献

青木 滋之 (2016) 「拡張型のトゥールミンモデル：ライティングへの橋渡しの提案」『会津大学文化研究センター研究年報』23: 5-24. <<http://doi.org/10.15016/00000135>>

佐賀県教育センター (2007) 「思考・判断力をはぐくむ小・中学校社会科学習のありかた：討論型学習で判断理由を明確にさせる意思決定場面の工夫を通して」 <https://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h19/h19syakai/gaiyou/gaiyou.htm>

Toulmin, Stephen Edelston (1958) *The uses of argument*. Cambridge University Press.

氏川 雅典 (2007) 「トゥールミンの議論モデルの変容: 批判から寛容へ」『ソシオロゴス』31: 1-19. <<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slogos/archive/31/ujikawa2007.pdf>>

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

第4講 専門用語と理論体系 (つづき)

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 概念・用語と理論をどのように把握するか

1 宿題について

専門用語について

- 複数の単語の組み合わせである場合、個々の単語の意味をよく考える
- 似た言葉との違い
- 複数言語間の翻訳 (原語表記がわかる場合はそれを書くこと)
- 歴史、学問分野と論者によるちがい
- 抽象化 vs. 具体化 (一般化 vs. 個別化)
- 定義中に出てくる用語についても検討する

理論について

- どのような意味で「説明」になっているか
- どのような「体系」に組み込まれているか
- 抽象化 vs. 具体化 (一般化 vs. 個別化)

グループに分かれて討論

2 次回予定

今回は研究に使う「資料」をとりあげます。自分の研究テーマについてどのような資料があるか、先行研究ではどのような資料が使われてきたかを考えておいてください (提出不要)。

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

第5講 資料の評価と活用

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] データ・資料の収集と評価の方法

1 1次データ・2次データ

実証研究に用いるデータについては、「1次」「2次」の区別をすることがよくある：

1次データ： 自分自身で新規に (実験・調査・発掘・シミュレーションなどによって) 収集したデータのこと

2次データ： 他人が収集した (公開された) データのこと

1次データの場合にはデータ収集の方法や過程を自分自身が知っていて問題点を認識しやすいが、2次データの場合には必ずしもそうではない。

→ メタデータ、パラデータとその評価 (社会と調査 2017)

→ 研究不正と実験ノート

2 1次資料・2次資料・3次資料

一方で、公刊された資料を利用する場合、その資料を「1次」(primary)、「2次」(secondary)、「3次」(tertiary) 等に分類することもある：

Primary sources are original materials that are close to an event, and are often accounts written by people who are directly involved.An account of a traffic incident written by a witness is a primary source of information about the event; similarly, a scientific paper documenting a new experiment conducted by the author is a primary source on the outcome of that experiment. Historical documents such as diaries are primary sources.

A secondary source provides an author's own thinking based on primary sources, generally at least one step removed from an event. It contains an author's analysis, evaluation, interpretation, or synthesis of the facts, evidence, concepts, and ideas taken from primary sources. They rely on primary sources for their material, making analytic or evaluative claims about them. a review article that analyzes research papers in a field is a secondary source for the research. A book by a military historian about the Second World War might be a secondary source about the war, but where it includes details of the author's own war experiences,

it would be a primary source about those experiences. A book review too can be an opinion, summary or scholarly review

Tertiary sources are publications such as encyclopedias and other compendia that summarize primary and secondary sources. Many introductory undergraduate-level textbooks are regarded as tertiary sources because they sum up multiple secondary sources

(Wikipedia 2019)

この分類の場合、**入手可能な資料の範囲で** 議論の根拠をどこまでさかのぼれるかが問題である。

3 例題

下記の事例の場合、(a1) あなたが撮った写真、(a2) SNS への投稿、(b1) マスメディアの記事、(b2) その記事に転載された写真、の4つについて、上記の判断基準に沿って分類してみよう。あなた自身、記事を書いた記者、論文を書いた研究者のそれぞれの立場に立って考えること。

あなたは偶然ある事件に遭遇し、その場で写真を撮って、SNS に解説付きで公開した。その投稿がマスメディアで取り上げられ、その記事には写真も転載された。さらに後年、この事件についての研究が行われ、これらの SNS 投稿や記事を引用して論文が書かれた。

4 データ・資料の選択・収集とその評価

- 各自が収集した論文の主要な根拠であったデータ・資料について、上記の分類をあてはめてみよう
- 各自の研究テーマに応じて、どのようなデータ・資料があるか考えてみよう

文献

社会と調査 (2017) 「特集 パラデータの活用に向けて」『社会と調査』18: 4-61.

Wikipedia (2019) “No original research”. *Wikipedia*. <<https://en.wikipedia.org/wiki/WP:NOR>> (15 March 2019, at 23:22).

第6講 アイディアの創出

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] アイディアを出してまとめていく方法

1 ボトムアップ法

こまかいところからつくりはじめ、それらをあとからまとめる方法。KJ法 (川喜田 1967, 1970; 大岩 n.d.) など。

- カード (古紙を切ったものなどでよい) を用意する
- 思いついたことをカードに書く
- 全部並べて一覧し、**直感にしたがって** 「似ている」カードをまとめる (いわゆる「カルタ取り」)
- 各グループに、その特徴を表す「ラベル」をつける
- 紙の上に図解する、文章を書くなど

2 トップダウン法

- 文章や発表の構成を大きな紙に書く
- アウトラインプロセッサ

3 混合方式

マインドマップ (月刊ビジネスアスキー編集部 2010; マインドマップの学校 n.d.) など

- 大きな紙と色ペンを多数用意する
- 中央にテーマをあらわす絵を描く
- そこから周囲に「ブランチ」(branch: 枝) を伸ばし、それに表題をつける
- ブランチを枝分かれさせながら、思いついたことを書いていく
- ことばで書いてもよいが、図や絵を使い、視覚的・色彩的に描くのがよい

4 宿題

自分がレポートで取り上げる内容に関連することについて、現段階でのアイデアをできるだけたくさん書き出す。方法は何でもよい。

次回授業開始までに Google Classroom のストリームにアップロードしておくこと (写真でよい)。

文献

大岩元 (n.d.) 「カード操作による発想法」. <<https://crew-lab.sfc.keio.ac.jp/kj.html>>

川喜田二郎 (1967) 『発想法: 創造性開発のために』 (中公新書) 中央公論社.

川喜田二郎 (1970) 『続・発想法: KJ法の展開と応用』 (中公新書) 中央公論社.

月刊ビジネスアスキー編集部 (2010) 『本当に頭がよくなるマインドマップ "かき方" 超入門』 アスキー・メディアワークス.

佐藤望 ほか (2020) 『アカデミック・スキルズ: 大学生のための知的技法入門』 (第3版) 慶應義塾大学出版会.

マインドマップの学校 (n.d.) 「マインドマップはなぜ役立つ?」. <<https://www.mindmap-school.jp/mindmap/why/>>

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

第6講 アイディアの創出 (つづき)

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] アイディアについて、他人と議論する

1 課題 1: 説明と意見交換

各自が作ってきた資料を見ながら、グループで意見交換する

- 資料に載せたすべてのことについて、ひととおり説明すること
- 説明の途中でも、思いついたこと、疑問に思ったことをどんどん説明してよい
- 厳密な理論展開や根拠については考えなくてよい

2 課題 2: 問いと答えのリストを作成

現段階でのアイディアに基づいて、問いと答えの候補を、できる限りたくさん書く。

- ありうる質問
- 答えの予測
- 根拠として用意できる (探せばありそうな) 資料等の候補
- 現段階で参照している文献・資料

箇条書きでもいいし、表のかたち (大島ほか, 2005, pp. 36-37) でもいい。

次回授業開始までに Google Classroom に提出

3 期末レポートと口頭試問

3.1 レポートの形式

この授業での「期末レポート」は、**ひとつの問い**を立てて、それに対する「答え」「根拠」等を、一定のフォーマット (初回授業資料参照) で記述する。論文のかたちにしなくてよいので、箇条書き等で、必要な情報を短くまとめること (A4用紙1-2枚程度)。

3.2 期末レポート (暫定版)

7/27までにいったん提出。

3.3 口頭試問

7月末から8月初頭に、口頭試問をおこなう。1人15分程度。時間はそれぞれ決める。

発表会の時の資料から改訂した部分がある場合は、改訂後の資料を持っていくこと。試問ではいろいろなことを聞かれる可能性があるので、参照する可能性のある資料を準備しておくこと。

3.4 期末レポート (改訂版)

期末レポートをさらに改訂した場合、8/12までに Google Classroom に提出すること。8/10までに提出されれば、レポート確定版として成績評価の対象になる。これがない場合、口頭試問時のレポートで評価する。

文献

大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂 (2005) 『ピアで学ぶ大学生の日本語表現: プロセス重視のレポート作成』ひつじ書房.

佐藤望ほか (2020) 『アカデミック・スキルズ: 大学生のための知的技法入門』(第3版) 慶應義塾大学出版会.

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

第7講 議論を組み立てる

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 厳密な思考と建設的な批判

1 課題

作成してきた問いと答えの表について、意見を交換する。

- 批判的に
- 細かいところの論理的整合性
- 全体的な一貫性
- 自分のもっている知識との矛盾

2 注意すべきポイント

概念と用語

- 定義と意味
- 実際の用法
- 当てはまるものと当てはまらないもの
- 他の概念との関連

論理

- 前提
- 必要条件と十分条件
- 逆や裏を考えてみる

データ

- 対象
- 測定と分析の方法
- 測定の妥当性・信頼性・再現性
- 結果をどのように解釈するか
- どのように一般化できるか

- 直観と内省

推論

- 確率と統計的推測
- 場合わけは網羅的か
- 複数の推論の組み合わせ

価値判断

- さまざまな価値基準
- 一貫性

3 「問い」と「答え」から論文へ

「問い」と「答え」1組だけで1本の論文ができるとは限らない。そうでないことのほうが多いので、いくつもの「問い」と「答え」を組み合わせる論文を書き上げるのがふつうである。

研究のプロセスでは、さまざまな問いを立てて、並行して答えを探していくことになる。おそらくその大部分は、論文では使われない。論文を書く際には、実際に答えを出してきた順序とはちがう組み立てかたを考えること。

第8講 価値ある研究のために

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 良い研究とは何か / 倫理的注意事項

1 良い研究とは

研究評価の3要素

- 有用 (relevant) → 問い (と答え)
- 新しい (original) → 答え (と問い)
- 正確 (reliable) → 根拠

2 プロジェクトとしての研究

Project: 有期性と独自性という2つの特徴を持つ業務。「有期性」とは、明確な始まりと明確な終わりがあること、「独自性」とは、これまでにない新しい何かを創出する新規性があること。(花岡編, 2012, pp. 1-2)

通常は、企業の中でチームを組んでおこなわれる一連の仕事を指すことが多い。この場合は、人員や予算の制約がプロジェクトの管理の上で重要となる。

学生がひとりでおこなう研究の場合は、このような制約はあまり重要ではない。それよりも、自分の使える時間・体力・知識を正確に把握して、余裕をもって計画を立てる (進行状況を見て適宜修正する) が必要になる。

【課題】 卒業論文 / 修士論文に向けてやらなければならないこととその時期的な見通しについて整理せよ。

3 倫理に関する諸問題

- 他人の発案によるアイデアを自分の発案であるかのように書いてしまった
- 出典を明示しないで他人の文章を書き写した
- 他人の文章から無許可で大量に引用した
- インタビューに基づいた論文のなかに、対象者が特定できるような情報があった
- 特定の個人や団体を中傷する文章があった
- 差別表現やステレオタイプを強化する表現の使用

3.1 情報をめぐる利害

文章を書く = 情報の流布 → 他人の利害との衝突

- 学問上の優先権
- 情報からえられる経済的利益 (知的所有権・著作権)
- 個人の秘密・名誉

学問上の優先権

学問の世界では、「誰が最初に考えたか (または発見/発明したか)」ということに非常に高い価値が置かれている。第1考案者 (または発見/発明者) は、そのアイデアや発見について「優先権」(priority) を持つ。

- 他人の発想や発見を自分のものであるかのように詐称 (plagiarize) しない
- 引用または参照によって誰の業績かをはっきりさせること (出版されているものに限らず、たとえば雑談のようなものであっても、アイデアが他人由来である場合はそのことを示すと考えること)

優先権は、著作権とはちがって、時間がたっても消滅せず、譲渡・相続不可能である。また、引用するにあたって当事者への連絡・許可は不要である。

大学のレポートにおける plagiarism は、筆記試験におけるカンニングと同様の不正行為とみなされる。

経済的利益の保護

経済的利益を保護するために、さまざまな「知的所有権」が設定されている：特許権/意匠権/商標権/実用新案権 など。これらはいずれも、**経済的利益** がなければ問題にならない。

著作権

これに対して、著作権 (copyright) の侵害は、経済的利益がなくても問題になりうる。(→「版權」は旧称)
著作権者は著作物について種々の権利を持つ

- 複製/貸与/変形/展示/口述/翻訳/放送 など

著作物とは、「思想または感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するもの」(著作権法2条)をいう。たとえば文章/音楽/舞踊/美術/建築/図面/映画/写真/プログラムなど (著作権法10条) がこれにあたる。アイデアやデータそのものではなく、それらの表現されたかたちが保護の対象になる。

- 作成者が自動的に著作権者になる (登録の必要なし)
- 著作権は譲渡できる
- 作者の死後一定期間 (国によってちがう) で消滅する
- 著作権者の許可なしに複製・販売・上演などをしてはならない。ただし例外として、私的利用のための小規模な複製と**正当な範囲での引用** は許可なしにしてもよい。

著作物からの引用

公表された著作物から通常の記事だけを引用する場合の許容範囲 (木下 (1981, p. 165) に田中加筆)

- 引用は400字以内
- 引用に関するルールを守っていること
- 引用文が自分の書くものの2割以内
- 著作物の全体を引用してはならない

文章以外の引用の場合は、つぎのようにする

絵画、図面、写真、CG など: 著作権者の許可をえる (木下, 1981, p. 166)。

表、詩歌、キャッチコピーなど: グレーゾーンだが、許可をとるほうがよい。歌詞については日本音楽著作権協会 (JASRAC) が手続きを代行していることが多い。

3.2 秘密を守る権利

名誉毀損罪: 「公然と事実を指摘し、人の名誉を毀損した者は〔……〕に処す」(刑法 230 条)

プライバシーの権利: 判例「宴のあと」事件(東京地裁 1964.9.28)「私生活をみだりに公開されないという法的保障」

名誉やプライバシーの侵害が許容される例外的な条件は、次のふたつ(刑法 230 条の 2 第 1 項ほか)。

- 公益性が高い
- 内容が真実である

ただし、つぎの場合は許容基準があまくなる。

- 死後相当の期間がたっている場合
- 公人／著名人である場合

公表前に十分な準備を

- 真実性の確認
- 当事者への情報開示(文書の性質、公開の範囲など)
- 当事者に許可をとる
- 文章の当事者チェック

許可のないまま公表せざるを得ないこともあるが、相応の覚悟が必要である。

3.3 差別表現とステレオタイプへの対処

マイノリティに対する蔑視表現、あるいは属性に基づく固定的イメージ(stereotype)を助長する表現に注意すること。

- 身体的特徴・障害・疾患・性向・民族・出身・年齢などに関する表現で、蔑視的な意味合いをふくむもの
- ステレオタイプを助長する表現: 「女性ならだれしも……」「関西人らしいボケツッコミ」
- 言及対象や読者が特定の属性を持っていることを当然の前提とする表現
 - 男性の医師は「医師」、女性の医師は「女医」と表現するような書きかた
 - 「17歳といえば高校生」
 - 「われわれ日本人は……」

こうした表現が問題になるかどうかは文脈による。自分の文章がどのような派生的効果を持つか、読者によってどのように受け取られる可能性があるか、よく考えること。

3.4 研究倫理教育

近年、研究不正を防止するためのガイドラインが整備されてきており、大学や研究機関には、トラブルを防ぐための教育が義務付けられるようになってきている

- 文部科学省による一般的な指針 (http://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/fusei/) のほか、各学会などの倫理規定を確認しておくとい (たとえば日本社会学会 (2005))
- 東北大学「研究不正の対応に係る体制整備について」 (<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kenkyo/fb/fuseibousi.htm>)
- 東北大学の研究倫理教材とオンラインコース (<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kenkyo/fb/education.html>)
- 人を対象とした調査・実験を計画している場合は、文学研究科の倫理委員会の審査を受けること

文献

花岡伸也 (編) (2012) 『プロジェクトマネジメント入門』 (シリーズ新しい工学2) 朝倉書店.

木下是雄 (1981) 『理科系の作文技術』 中央公論新社.

文部科学省 (2014) 「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」 (平成26年8月26日文部科学大臣決定).
<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/1351568.htm>

日本学術振興会 (2015) 「科学の健全な発展のために：誠実な科学者の心得」. <<https://www.jsps.go.jp/j-kousei/data/rinri.pdf>>

日本社会学会 (2005) 「日本社会学会倫理綱領」. <<https://jss-sociology.org/about/ethicalcodes/>>

東北大学研究推進審議会 (2007) 「研究者の作法：研究への愛と誇りをもって」. <<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kenkyo/fb/FFPleaf.pdf>>

東北大学学務審議会 + 高度教養教育・学生支援機構 (2018) 『あなたならどうする?: 誠実な学びと研究を考えるための事例集』 (第2版). <<http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp/handbook/>>